
< 理事長のごあいさつ >



ご挨拶

和歌山地域経済研究機構

理事長 小田 章

和歌山の経済活性化に寄与すべく和歌山商工会議所、和歌山社会経済研究所及び和歌山大学経済学部の三者が共同し本研究機構を設置したのが9年前の、平成8年の夏でした。当時、バブル経済が崩壊し、経済の建て直しが言われ始めましたがただ手を拱くだけで抜本的対策が提示されませんでした。そのうちに経済は回復するであろうと言う淡い希望が優先し、事の多くが先送りされてきたのです。それ故、確たる経済再建策も打ちだされることなく時だけが無闇に経過しました。しかし、数年前から今回の平成不況がただ事ではないことがやつのことで認識されだしました。大手ゼネコンの経営破綻、大手銀行の不良債権の表面化、都市銀行の大型合併、株価低迷、デフレ化現象等、日本経済がこれまで経験したことのない状況が表面化したからです。

こうした日本経済の危機は地方にも影響し、基盤の脆弱な地方の中小企業はまさに青息吐息の状況であり、多くの企業が倒産に追い込まれてしまいました。銀行の貸し渋り、景気対策の遅れ、需要の低迷等に対する政府の対応の遅れがもたらした悲劇と言っても過言ではありません。和歌山経済もこうした事態に翻弄され、多くの中小企業が大きな打撃を被りました。

こうした折り、平成13年に平成不況を乗り越えるべく華々しく構造改革をひっさげ、小泉内閣が誕生しました。爾来、3年を経過し、どん底の状況から幾分回復の様相が

見られるようになりました。一時期、8000円台を割りかけていた株価も12000円台に回復し、銀行等の金融機関の不良債権も一気に解消されるとともにリストラ等企業努力によって企業業績もかなり回復してきました。この回復は国の政策云々よりも民間企業の血の滲む努力に帰するところが大きいと考えられます。事由はともかく、このように日本経済全体を見れば、一時期に比べ明るい材料が出始めています。この状態が推移すれば、長く暗かったトンネルを抜け出すことは可能でしょう。この10年はよく「失われた10年」と表現されますが、私自身は非常に貴重な経験を積むことのできた10年と考えています。「歴史は繰り返す」とよく言われますが、この経験を忘れず日本経済が二度と間違った舵取りを行うことのないように政策立案者には心していただきたいものです。

本研究機構も微力ではありますが、日本経済を見据えながら、和歌山経済の活性化に資することのできる研究を続けることに一意専心したいと考えております。最後に、本機構が行っております研究の成果に関しまして皆様の忌憚のないご叱正・ご意見を賜り、それを糧に更なる研究の推進と深化を図ってまいり所存でございますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。